



ノベル付CG17枚+
文字無差分16枚入り!

PDF
同梱

ムッチムチの大地! 土女の母性!

ふたなりショートノベルCG集

ムツチムチの大地♡

土女の母性♡

「たっだいま〜っ」と

午後6時、今日は定時に仕事が終わりが
久々に早めの帰宅をすることができたオしは
リビングへ続くドアを開いた。

「あら？ おかえりなさい、お前君。
すぐお夕食の用意をしますね。」

「えっ？ あのお〜……」

そこには色黒でムツチムチのヤラシイ着物姿の女がいた。

「ど、どちらさんですか？」

「あら、やだ。私ったら自己紹介がまだでしたわね。
いつも妹たちがお世話になっていきます、
土女の美土緑と申します。」

みど

土女のお母さん

「妹たちが……美冷さん達のお姉さんですか！」

「はい。妹たちは少し悪い物に出かけていまして、留守を頼まりましたの。」

美冷さん達のお姉さんがこんなほわっとした

色黒ムツチムチエロお姉さんだったとは……あ、いかん、あんなエッチな
体を見てたらチンポが勃起してきた。何とかごまかさんと……

「あら、お前君どうなされたの？」

「いや、ちよっと仕事で疲れたのか体の調子が……」

「まあ！ 大変！ こちらで少し横になって！」

その場で正座をする美土緑さん。オしは促されるまま彼女の膝枕の上に頭を置いた。

「ううしていれば少しは楽になるかと思えますわ。」

ムツチムチの柔らかい太ももだった。ああ……癒される。
ふと、彼女の股間が目に入った。そこには美冷さん達と
同じくかわいいらしいモノがあった……



「……あの、美土緑さんこれって……」

「あら、見つかったてしまいましたがね。妹たちと同じく私も生きてますのよ♡」
「そういうとしオタードの横からチンポを取り出す美土緑さん。」

「おっ……おっ……すごい……美土緑さんのポリュームある体のせいか、
小さいおちんちんに見えてすごくかわいいですね……♡」

「んふふっ……舐めてみますか？少し楽になるかもしれないわよ♡」
「少し照れ臭そうに美土緑さんは言った。」

「は、はい……いただきます♡」

オしは目の前にある美土緑さんのおちんちんをはぶっとほおばった。



「んっ…んっ…美味しい、すごく美味しいですよ、美土緑さん♡」
「ふふっ…少し汗ばんでるので臭わないかしら？」
「この臭いがいいんですよ、はむ……♡」
オしは彼女のチンポを一心不乱にほおばっていた。
「そんなに一生懸命ほおばって、お前君はかわいいですねえ♡」
「なんかこうして膝枕してもらってしゃぶってると
甘えなくなっちゃう…ママあ♡♡」
「うふふっ…いっぱい甘えていいんですよ、お前ちゃん♡」



「あむっ…んっ…はあ…美土緑ママのおちんちんガチガチだよ♡」
「んっ…そんなにおちんちんチュッチュされたらおチンポミルクでちゅいそう…♡」
「んう…♡美土緑ママのおチンポミルク、ちようだい…♡」
「あん…ダメ…あっ…ああっ…♡」
びゅっ！ぶびゅっ！
お淑やかな美土緑さんのように、精液は上品に亀頭から発射された。



「はああ…♥はしたないおチンポミルウいっぱいでした♥
お前ちゃん、美味しかったかしら?」
「うん、すごく美味しかったでしゅ♥次はおっぱいちょーだい♥」
「んふふっ、ホント甘えんぼさんね♥」



「さあ、おっぱい上げね♡」
そういって美土緑ママはオレの口元におっぱいを突き出してきた。
「デカッ…♡んん…♡…っちも触っぺっちも♡」
「んふふっ…♡…っちも触っぺっちも♡」
そういうと美土緑さんはオレのチンポに
自身のチンポ重ねて握らせてきた。
「どあ？授乳兜合わせといったところかしら♡」



「あぁっ、しゅごいでしゅ♡ママのおちんちんカチカチだし、
おっぱいはすっごく柔らかくておいちい♡」
「あんっ…♡おまえちゃんもおちんちんカッチカチね♡」
「だってえ、ママのおっぱいもおちんちんも
すっごくエッチなんだもん♡」
そういつてオしはテロテロと美土緑さんのおっぱいを舐めまわした。
「んふふっ…♡かわいい…♡」



「あっ……あぁっ……♡ママぁ……おちんちんからなんかでちゃいそう……♡」
「んっ……♡いいわよ、いっぱい出して♡」
「ママとおチンポミルウ掛け合いっこしましょ♡」
その言葉でオシの手の動きは早くなった。
「ニチュニチュと音を立ててチンポ同士が絡みあった。」
「あっ……♡もうダメ♡あああああああぁあぁっ!!」
「あんっ……♡お前ちゃん……あぁっ♡お、おっぱいもイッちゃっっ♡」
「ぶっ!!びゅるっ!!びゅるるっ!!ぶびゅーっ!!」
チンポから精液が発射されると同時に、
美土緑さんの乳首からは大量の母乳が噴出した。



「はっ…はあっ…あっ…ごめんね、
お顔にいつばいかかったわね♥」
「ん〜♥ママのおっぱいはミルクもおチンポミルクも
すごくエッチだから大好きだよ、ボク♥」
「んふふっ、そう♥お前ちゃんもミルクいっぱい出たね♥」
「うん♥ママのチンポすごく気持ちよかった♥」
美土緑ママのキンタマにぶっかった精液は、
とろりとキンタマを伝っていた。



仰向けに、足を広げて寝かせられていた。
まるでオムツを穿えられる赤ちゃんのようだった。
「さあ、いっぱいおもらししちゃったからキレイキレイしましうねえ♡」

そういうと美土緑さんはオしのチンポに
自身のチンポを擦り付け、兜合わせしてきた。
「あんっ♡こんな態勢でチンポ擦り付けられるなんて恥ずかしいでしゅ♡」
「ふふっ、恥ずかしいですけどよ♡」
「おちんちんキレイキレイするだけですからねえ♡」

擦り合わせているうちに二人のチンポからはガマン汁があふれてきていた。
それが絡み合い、ニチュニチュとヤラシイ音を立てて
二人のチンポを絡み合わせていた。

「あっ、あっ♡ママあ、なんかおちんちんから出てきてるよ♡」
「ふふっ、これはおちんちんをきれいにする石鹸よ♡ほらあ、泡立ってるでしょ♡」
「あっ、すごいね♡なんかすごく気持ちいいし♡」
「んふふっ、ママもすごく気持ちいいわよ♡」
二人のガマン汁でチンポはテッカテカに光沢を放っていた。

「あっ、あああっ♡ママあ、おちんちんからおしっこ出ちゃいらさう♡」
「あらあら、しょうがない子ね♡でも、ママもなんだかおしっこ
出ちゃいそうだから一緒に出しちゃいましょ♡」

「う……うん♡あ、あああっ、出るよ、出るよ♡ママあ♡」
「ま、ママもで、でちゃう……♡あっ……♡」
びゅっ!!ぶびゅびゅっ!!ぶびいっ!!
二人のチンポから精液が大量に吐き出された。
そして美土緑ママのおっぱいからは母乳も大量に放出されていた。

「はっ、はあ、はあ♥ママおっぱいからもなんか出ちゃってたよ♥」
「やだ、恥ずかしい。女の人のはあ、おっぱいからもこっぴゅって
おもらししちゃうことあるのよ♥」

「へ、へえー♥すごいー!」
「あらあら、それにしてもキレイにしたのにまた汚れちゃったわね。
もう一回キレイキレイしましょうね♥」
そういうと美土緑ママは二人の精液で汚れたチンポを
再び擦り合わせるのだった。



オしは今美土緑ママに抱っこされていた。俗に言う逆駅弁状態だった。
ヌチチツ……♡
音を立てて美土緑ママのチンポがオしのケツマンコに入ってきた。
「んああああっ……♡マ、ママのチンポがボウのケツマンコにいい……♡」
「んふふっ……♡入っちゃったわね♡痛くないかしら？」
「み、美冷ちゃんや、炎美ちゃんにいつつも入れられてるから……♡」
「あらあら、はしたない子たちね。ふふっ、でもいい締めまりね♡」
そういうと美土緑ママはゆっくりと体を上下に揺らし始めた。



ズッズッ!!

上下運動は激しさを増していた。オレのケツマンコからは腸液と美土緑ママのガマン汁が合わさった汁がとろりと垂れてきていた。

二つの液により、ケツマンコからはヌチヌチとヤラシイ音が出ていた。

「んあっ♡あああっ♡ママあ♡ケツマンコ気持ちいいよあ♡」

「ママもよ♡ママもおちんちん気持ちいい♡」

大好きなお前ちゃんちとチュッチュッしながらお尻できて気持ちいいわ♡」

チュッチュと絡み合う二人の舌。互いの下を求めあい、チンポはさらに勃起していった。



「んっ♡んっ♡イクよ、お前ちゃん♡
お前ちゃんのケツマンコの中にママの精子出しちゃうよ♡」
「あっ♡あっ♡出してえ♡ママのチンポ汁出して
ボクのケツマンコ妊娠させて弟作ってえ♡」
「いいわよ♡ママの濃い精子で赤ちゃん作っちゃおうね♡あっ…イクっ…あああっ…♡」
「ぶっ!!びゅる!!びゅるる!!ぶっぶびゅっ!!
「んああああっ♡」
大量の精液がオシの腸内を駆け巡った。



「はああ♥よく頑張ったねえ、えらいわよ、お前ちゃん♥」
「うん、ホウ頑張ったよ♥ママのチンポ汁いっぱい受け取ったよ♥」
「んふふっ♥ヤラシイ汁がいっぱいケツマンコから溢れちゃったね♥」
「うん…♥」
「おーい、お二人さんもうよいかの?」
余韻に浸る二人に声をかける者がいた。
「げっ!? え、炎美さん!」
「美雷達もいるよ〜♥」

「み、みんな帰ってたのかよ…!? いつから!?」
うるたえるオしに美冷さんが口を開いた。

「膝枕でイチヤイチヤしたあたりからおったぞ」

「ほぼ、はじめっからじゃないですか!」

「ケラケラ、それにしてもお前殿は赤子ぶれいが好みだったとは」

「かわいかったよ♥美土緑ママあ〜って♥」

ふ、不覚…!これは一生いじられるパターンだ!!なんてことだ。

「うふふっ、お前ちゃん、大丈夫よ。ママも一緒にいてあげるから、

お姉ちゃんたちにいじめられたらママのところへいらっしやい♥」

「ま、ママあッ!!」

「あー!姉上ずるい!!」

新たな住人が増え、にぎやかさが増すのだった。

ムッチムチの大地!土女の母性!完

































